

東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー

*学年の学年および教員の順位は2024年度のもの

- 地域サステナビリティ 3年 菊地美瑚 佐藤正樹
- アート & マネジメント 3年 入井優希奈 竹田朱里
- スポーツプロモーション 3年 森千紘
- 指導教員 特任教授 阿部耕也 准教授 山本隆太 講師 内山智尋

フィールドワーク実施協力者

合同会社 so-an

地域概要

東伊豆町は、伊豆半島東部に位置する漁村である。私たちが主に活動の拠点としている稲取地区は海と山に囲まれた豊かな自然環境と温泉という観光資源を持ち合わせ、多くの観光客が訪れる町である。朝市では、地域の特産品を使用した商品が売り出されており観光客や地域住民で賑わう活気ある場所となっている。

稲取は雛の吊るし飾り発祥の地である。毎年1月20日から3月31日にかけて「雛の吊るし飾り祭り」が開催されている。素戔鳴（すさのお）神社では、神社の118段の階段に雛人形と雛の吊るし飾りが飾られている景色が見られ、カメラを片手に多くの方がその景色を楽しんでいる。また、若者の挑戦を応援している街であり、活動の際は多くの地域住民の方に興味を持っていただき、協力をいただいている。

受け入れ先の代表である荒武様は稲取の日常的な風景に魅力を感じ、これからも守っていくために空き家改修・活用を行っている。東伊豆は移住者率が高いものの、高齢者が多く子供の数が少ない。その現状をどう改善していくかがこれからの課題である。町としては子育て支援に力を入れており「ベビーファースト宣言」や「保育留学事業」を行っている。関係人口をどう増やすかがカギを握る。

これまでの活動

東伊豆学生サミット（各年）

東伊豆で活動する他大学の学生や稲取高校の生徒と交流し、地域活動の報告や今後の展望について意見交換を実施。

ダイロク通信（各月）

フィールドワークの活動内容を地域の情報紙「ダイロク通信」に掲載し、地域の皆さんへ発信。

何でも屋（2023年）

町役場や地元の和菓子店、農家などでお手伝いを行い、地域住民との交流を深めた。

成立学園高校合同フィールドワーク（2023年）

東京の高校生に地方国公立大学への進学を考えるきっかけを提供すると同時に、稲取の魅力を高校生の視点から新たに発見する活動を実施。

朝市前看板作成（2023年）

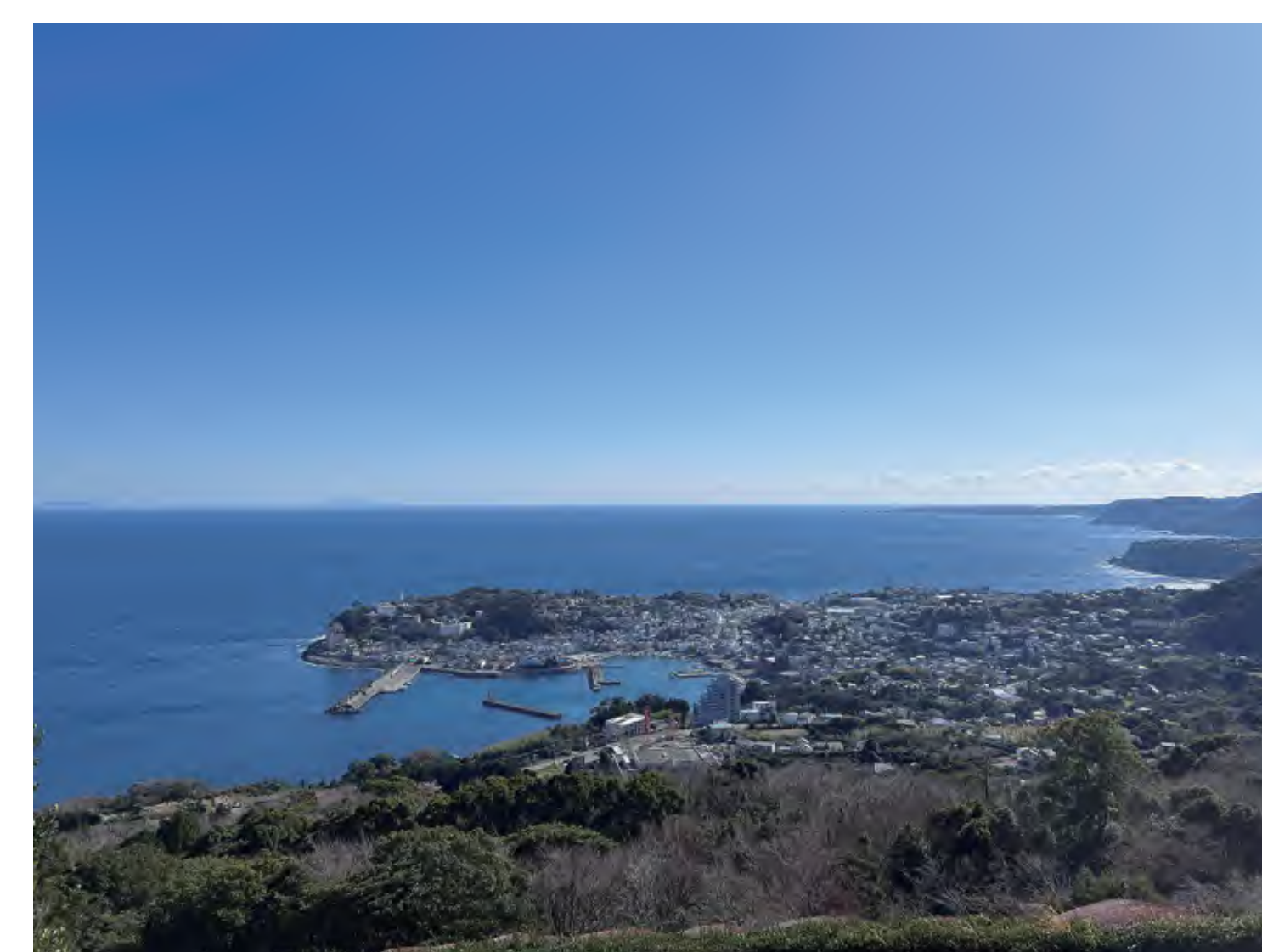
朝市会場に設置する看板をデザイン・作成し、地域のにぎわいづくりに貢献。

シャッターアートの作成（2023年）

地元の飲食店のシャッターにアートデザインを施し、街の景観を彩った。

東伊豆魅力発見大学校（2024年）

旧稲取幼稚園を活用し、地域の方々に東伊豆の魅力を再発見してもらうイベント。地域事業者や地域おこし協力隊、学生などの協力を得て、各教室を「教科」に見立てた体験型企画を実施した。イベントでは、地元の特産品が並ぶ購買部やいちご大福づくり、動物ふれあい体験、雛のつるし飾り制作など、地域の文化・自然・スポーツを楽しむ多様なプログラムを展開。また、伊豆半島ジオパークの学習やオンラインオープンキャンパスを通じて、地域の魅力を深く知る機会を提供した。さらに、東京都の成立学園高校の学生との合同フィールドワークを行い、イベント運営にも協力していただいた。地域の若者と外部の学生が交流し、新たな視点から東伊豆の魅力を発見する場となった。地域資源の活用方法を提案し、東伊豆の未来を担う次世代とのつながりを築いた。



東伊豆町の様子



成立学園高校合同フィールドワーク



シャッターアートの作成



東伊豆魅力発見大学校

2024年度の活動について

私たちの代だけになってはじめてのフィールドワークでは、まず「Green Forest festival」を訪れた。来場者目線でイベントの良い点を吸収することができた良い機会であった。昨年自分たちが企画実行したイベントである「東伊豆魅力大発見」の反省点を見つめ直し、比較することで学びを得た。次に、昨年お世話になった方々から話を聞きミーティングを重ねることにより、フィールドワークの最終着地点についての見解を深めていった。4回目のフィールドワークでは、役場から依頼を受けた巻き上げ機3体のペイントを行った。地域の方々と交流を交えながら楽しく作業を行い、2日間という短時間で3体全ての色付けを終えることができた。

最後のフィールドワークでは、旧稲取幼稚園をお借りして行う学生主体のイベントを開催する予定だ。今まで静大生たちが活動してきたことや、協力してくださった地域の方々への感謝、そして活動することができた喜びを伝えられるようなイベントにしたいと考えている。



巻き上げ機のペイント前の様子



巻き上げ機のペイント後の様子

これまでの活動を振り返って

入井 優希奈（アート&マネジメントコース）

フィールドワークの活動によって、私にとっての故郷と呼べる町が一つ増えた。これは、生まれた場所や育った場所、両親の故郷、それぞれが異なる環境であった私の大きな財産となる出来事となった。今まで活動を行ってきた約2年間で、関わる人、あいさつを交わす人、SNS上で会話した人は着実に増えていった。特にここ半年は、地域の今まで関わってきた方から依頼され生まれる活動もより多くなっていった。ガラガラと自分の「故郷」という概念が崩れていったのを感じた。近年、私を含め多くの人々が抱えている孤独を少しでも解消することのできる方法は、帰属意識を持てる場を一つでも増やすことである。東伊豆には、私のように一人彷徨う人々を受け入れる環境が存在する。その貴重な存在として、東伊豆という「故郷」を頼りに自分の道を進んでいきたい。

菊地 美瑚（地域サステナビリティコース 地域共生分野）

イベントがあった、看板ができた、たまに見かける若い子たちがまたいた。きっかけは何であれ、地域で長く活動していくには地域の人たちに少しでも私たちの存在を知ってもらい、理解してもらう必要がある。現地での活動を重ね、私たちは着実につながりの輪を広げ、関係を深めていった。その過程で様々な苦楽を仲間たちと共有し合った。対面することで感じられる人の温かさや、繰り広げられる議論があり、人と”直接”関わるという事の重要性を痛感した。東伊豆が「何事にも挑戦できる環境」であったからこそ、自身の成長や学びがあまりにも多くあったのだろうと感じる。

佐藤 正樹（地域サステナビリティコース 地域経営分野）

フィールドワークでの活動は、座学にはない学びを多くの機会で多くの視点から吸収するものであった。長期に渡る活動の中で、活動に対する気持ちの変化やその変化の要因について個人でもチームでも時間をかけて考えた。東伊豆には学生を応援してくださる方々が多く存在する。その方々の存在がフィールドワークへのモチベーションを高め、東伊豆に関わる時間が楽しものであった要因だと考える。そのような挑戦する環境で楽しいことに全力で取り組めた経験は自らの財産であると同時に、次の挑戦につながる契機でもある。

竹田 朱里（アート&マネジメントコース）

「東伊豆」という自分の生活と全く関係のなかった地域と静岡大学フィールドワークという機会を通じて関わりを持つことができたことが、とても喜ばしいことでありこの縁に感謝したいと思っています。活動をしていく中で、地域の方々から温かい言葉をかけて頂いたり、新しい出会いや交流が生まれたりする瞬間はかけがえのないひと時だったと感じています。学生主体で企画立案することの難しさを活動を通して実感し、自分自身を成長させることができました。フィールドワーク終了と同時に東伊豆に行くことができる機会が少なくなってしまうけれど、また戻ってきたいと思わせてくれるような地域でした。この場で築いたものを大切にしたい。

森 千紘（スポーツプロモーションコース）

東伊豆は自由度の高いフィールドであり、私たち学生の主体性が求められていたと感じた。そのため、何をしたら地域のためになり、私たちのやりたいことも叶えられるのか迷うことも多かった。ミーティングも定期的に行うことで、方向性についても話し合い、チームで共通認識を持ってから実地で活動することができた。また、東伊豆で活動していると、住民の方から暖かい声をかけられ、嬉しく思うとともに、支えられていることに気づいた。フィールドワークで関わっていただいた皆様に感謝の気持ちを届けられるように最後のイベントに取り組みたい。